

電気のふるさと

福井県おおい町 特集号



トップにきく

時岡 忍さん × 新 欣樹
(おおい町長) (電源地域振興センター理事長)

PICK UP!

町を活気づける農家の主婦パワー
～人気を呼ぶおおい町の手づくり特産品～

My Angle ～専門家の視点から～

専門家とのコラボレーションの仕方

センター掲示板

「産品相談・商談会」のご案内 ほか

ご当地自慢

若州一滴文庫



おい町長
ときおか しのぶ
時岡 忍 さん

昭和12年生まれ。会社員を経て昭和63年に日新工機（鉄工会社）を設立し代表取締役役に就任。平成8年から大飯町収入役を3年間務め、平成11年大飯町長就任。平成18年3月、大飯町と名田庄村合併に伴い大飯町長退任。平成18年4月におおい町長就任。現在3期目。

トットプロ

きく

福井県おおい町

時岡 忍 さん × 新欣樹

(おおい町長)

(電源地域振興センター理事長)

海、山の自然に恵まれ、古くは大陸から畿内への文化伝来の道であったおおい町。原子力発電所立地地域の強みを活かしてインフラを充実させてきた。今後、地域の魅力をまちづくりはどう活かしていくのか。交流人口の増大による町の活性化を目指す時岡町長にお話を伺う。

■福井県おおい町 (人口：約9,000人 面積：212km²)

福井県の南西部に位置し、西は大飯郡高浜町、京都府綾部市、南は京都府南丹市、東は小浜市、滋賀県高島市に接しています。町域の90%以上を山林が占め、京都府との県境を源とする二級河川・佐分利川水系と南川水系が西から東へ向かって流れ、小浜湾に注いでいます。青戸の入り江を挟む大島半島とは、青戸の大橋によって結ばれています。大島地域に設置されている大飯発電所は西日本最大の電力供給基地として関西エリアの約4分の1の電力をまかっています。

■原子力関連施設

大飯発電所

出力：471万kW(1～4号機計) 運転開始：昭和54年3月(1号機)
事業者名：関西電力株式会社

■今号の表紙

若狭おおいのスーパー大火勢(おおがせ)





ホテルうみんぴあ：交流人口や産業の活性化をねらいとした複合施設群「うみんぴあ大飯」にあるホテル。



長井浜海水浴場：人工海浜の海水浴場で芝生広場やサニタリー棟など充実した施設が自慢。



野鹿(のか)の滝：グリーンツーリズムで注目されている旧名田庄村にある嶺南地方最大の落差30mを誇る滝。

「平成の合併」による再出発

新・平成十八年三月に旧大飯町と旧名田庄村が合併し、「おおい町」が誕生してから約四年が経ちましたが、合併の経緯やご感想をお聞かせください。

時岡町長：私が旧大飯町長の時に旧名田庄村との合併を決断した理由は二つあります。第一に、市町村合併は全国的な動きであり、特に人口一人未満の自治体は合併による規模・能力の充実および行財政基盤の強化が必要とされていきました。第二に、旧大飯町と旧名田庄村はともに川の両側に集落が存在する環境にあり気質も似ているため、合併後の融和がすすみやすいと考えました。

合併を契機に、福井県にインフラ整備の推進をお願いし、現在大津呂ダムの建設および県道坂本高浜線の改良工事が進められています。大飯地区はこれまで夏期においてしばしば深刻な水不足に見舞われており、更に「うみんぴあ大飯」の開発による水需要の増大も見込まれています。このため大津呂ダムによる水道用水の供給が期待されています。県道坂本高浜線は大飯地区と名田庄地区を直接結ぶ唯一の幹線道路ですが、両地区間は急峻な地形でヘアピンカーブが連続し、幅員が狭いこと

から大型車の通行が不可能で、冬期は一般車の通行でさえ困難になっています。また、夏場は京阪神からの海水浴客による交通渋滞が頻発しています。大飯地区、名田庄地区ともに人口が減少している状況において交流人口の増大による活性化は大変重要であり、道路整備により両地区間の交流および外部との交流に弾みがつくことが期待されます。

新・合併に伴い、いろいろとご苦勞もあつたことでしょうか。

時岡町長：旧大飯町は昭和三十年に佐分利村、本郷村、大島村の三村が合併してできた町です。役場職員や住民が出身地の違いを越えて融和し、一つの町としてのまとまりができるまで幾多の苦勞と五十年もの歳月を必要としました。

旧大飯町と旧名田庄村は合併後四年が経過し、保険料や税額の統一を

行ったほか、子ども会事業や高齢者スポーツ大会などを両地区の住民が集い開催するようにする等、融和にむけて取り組んでいます。これからも、両地区が真にひとつの町として感じられるよう更なる取り組みを継続してまいります。相場の労力と時間を必要とするであろうと覚悟しています。

「おおい」なる自然と文化、訪れる人へのまごころの心

新・人口減少・少子高齢化が進行していく状況において、複雑・多様化する住民サービスを提供していくためには合併が一つの選択であったのでしょうか、合併後のおおい町にとっては旧大飯町の美しい海岸や海水浴場と旧名田庄村の山里などのバラエティに富んだ自然環境は大きな強みなのではないでしょうか。



電源地域振興センター理事長

あたらしく 新 欣樹

昭和18年生まれ。昭和40年、通商産業省入省。科学技術庁長官官房長を経て、中小企業庁長官などを歴任。石油公団理事などを経て日本原子力発電株式会社副社長、平成21年7月より財団法人電源地域振興センター理事長。



時岡町長..お

い町ではグリーンツーリズムやブルーツーリズムなど、観光や体験型学習による交流人口の増大を目指してい

ます。海を中心とした交流、山を中心とした交流の二本立てのメニューが示せるというのは、観光客にとって魅力的なのではないかと思えます。また、町民にも人の良い、穏やかな人が多く、町が目指している「訪れる人へのもてなしの心」が既に備わっているものと考えています。

大飯地区において、うみんぴあ大飯は原子力立地の集大成として、交流人口の増大や、産業の活性化をねらいとした施設群であり、ホテル、マリナー、福井県の児童施設、関西電力㈱のPR施設が立地していま



大飯発電所：面積約188万m²の広大な敷地にあり関西電力では最大の発電所として4基合わせた総出力が471万kW。(写真は関西電力㈱提供)。

す。現在もレジャー、教育、文化、飲食、物販関連の企業・団体を主たる対象として企業誘致活動に取り組んでいます。このうみんぴあ大飯を、町一番の賑わいの場として創出していきたいと考えております。例えば、地元野菜などの地場産品を格安で販売できるようなスペースを設けるなど、地元で農業や商売をしている方に

また、名田庄地区では夏期に「星のファイエスタ」という祭りが開催されます。街部には光があふれていますが、山間部は外の光が少なく美しい星空を楽しめます。地元の若者たちの手で運営されており、町内外の人からも愛される、町に欠かせない元気の源となっております。

新..夏期には大火勢という勇壮な祭りもあるようです。

時岡町長..スーパー大火勢のことです。もともとお盆の送り火行事として三百余年の伝統がある大火勢が発祥でして、これをイベントにしたのがスーパー大火勢です。燃え上がる高さ二十メートル、幅八メートル、重さ一トンの木の葉型の巨大松明を若衆が「ヤッサー、ヤッサー」という勇ましい掛け声に合わせて回転させます。あたり一面に火の粉が飛び散る壮大な火祭りです。毎年多数の観光客が訪れ、町が一年で一番活



星のファイエスタ：8月中旬に開催される星がテーマの夏祭り。コンサート、パレード、花火大会、幻想的なレーザーショーなどが開催される。

気づく時でもあります。このスーパー大火勢も星のファイエスタと同様、住民の手作りイベントとして町を益々元気にしてくれています。

新..京都、奈良は春、秋には過ごしやすいのですが、夏はどちらも盆地にあるため大変暑く観光には不向きな季節と思われる。若狭湾沿岸の市町が連携して夏期の観光イベントで誘客をはかるようになると面白くなります。

一方、おおい町は古くからの歴史のある土地であり、寺院や仏像などの文化財も豊富と聞いております。歴史好きの人たちには魅力のある町ではないでしょうか。

時岡町長..旧大飯町の大島半島はかつて「陸の孤島」と呼ばれたほど交通が不便な場所だったにもかかわらず、仏像や寺院などたくさん文化

財が残っています。古代には中国や朝鮮半島からの渡来人が多かったよう、大陸から伝来した仏教文化が京都や奈良に伝わる通り道だったと考えられます。大島半島に清雲寺というお寺があるのですが、そこに安置されている三尊一具(毘沙門天、吉祥天、善膩師童子)は鎌倉時代の作品で重要文化財として国から指定を受けております。三尊一具で指定を受けているのは清雲寺のほか京都府の鞍馬寺と高知県の雪深寺の二寺しかなく、おおい町の貴重な財産です。

また、旧名田庄村は平安時代の有名な陰陽師である安倍晴明を祖とする土御門家の荘園があったところ。土御門家は京の公家ですが、鎌倉時代末期に名田庄と初めて関わりを持ち、応仁の乱により京都が戦火に見舞われた後、名田庄に移住しました。厩会館では土御門家に関する資料や、暦、易、天文などの資料を展示しています。



若狭おおいのスーパー大火勢：高さ20m、重さ1トンの木の葉型の大松明を回転させる祭りで嶺南地方を代表するイベント。約300年前から伝わるお盆の送り火行事が発祥となっている。

原子力発電所を活かした まちづくり

新・新興国の経済発展に伴う化石燃料価格の高騰および地球温暖化問題への対策として、原子力発電の推進は極めて有効であり、国策として実施されてきました。おおい町は西日本最大規模の原子力発電所を誘致することで、国策に協力してきました。このことは大いに誇りを持ってよいことと思います。原子力発電所の誘致によって町はどのように発展していきましたか。

時岡町長・私は若い頃、大阪に住んでいました。帰省して駅から出ると、目の前の道路は未舗装で土ぼこりがむんむんと立ちのぼっていたのを覚えています。当時の大飯町には目ぼしい産業がなく、町民の多くは町外に働きに出ていました。その頃、発電所誘致について賛成派と反対派が激しく対立しており、町長のリコールにまで発展しました。その後、原子力発電所が立地することとなり、



安定的な税収によるインフラ整備や雇用機会の増大をはかることができ、地域が大きく発展しました。町財政も破綻寸前だった

のが普通交付税の不交付団体になりました。今から振り返ってみると、激しい対立を克服し、原子力発電所の誘致を決断した先人たちの先見の明に感嘆せざるをえません。

新・電源立地地域対策交付金の活用状況はいかがでしょう。

時岡町長・電源立地地域対策交付金の使途は多岐にわたりますが、例えば昨年度ですと、うみんぴあ大飯に立地しているホテルの建設や水産加工施設の整備に活用しました。

うみんぴあ大飯に立地しているホテルは昨年十月に営業を開始しましたが、おかげさまで当初予測を上回る稼働率で推移しています。うみんぴあ大飯には福井県の児童施設や関西電力㈱のPR施設があり観光客の人気を集めています。以前は食事をすると、宿泊するところはありませんでした。ホテルの営業開始により、ようやくインフラ整備が一段落したところです。今後、ホームセンター等の進出が予定されており、発展が楽しみです。

水産加工施設は、地元で獲れる水産物をへしこ、干物、かまぼこ、天ぷらなどに加工するための施設です。今年の四月下旬、大島地区にオープンしました。小魚や水揚量が少なく市場に出せない魚などこれまで捨てられていた水産資源の有効活用により、また加工による高付加価値により、漁業者の所得向上をはかることができるものと期待しております。

今後も住民福祉の向上や地域活性化に資するような様々な事業に交付金を活用し、原子力立地のありがたみを感じていただければと思っています。

新・時岡町長は今年三月の選挙で三選を果たされたわけですが、三期目の町政に向けた抱負をお聞かせください。

今後の課題と展望

時岡町長・うみんぴあ大飯、保健・医療・福祉の総合施設「なごみ」、光ケーブルを使った高速通信網などハード面でのインフラ整備は一段落しました。これからは人の力を引き出していくために、ソフト面での工夫が必要となります。

町には特産品開発を目標にがんばっているグループがいくつかあります。例えば、「おおい夢工房」という女性グループは、会社組織となつたのですが、地元の特産品である梅を用いた無添加のゼリーやジャムなどの加工品開発や、地元の大豆と米を使用した味噌作り等を実施しています。また、先ほどお話しした水産加工施設では大島漁協女性部の「島じゃこ倶楽部」と大島の主婦グ

ループ「たまてばこ」がへしこ、干物、練り製品などを生産していくことが予定されています。町はこうした地元の担い手たちが活動しやすいよう商品開発や販売促進その他の面でバックアップし、町の魅力を全国に発信できるように特産品が生まれることを期待しています。

町民の創意工夫による特産品開発や観光開発等による交流人口の増加を促し、さらには総合計画の目標としている定住の促進、活動の促進につなげていくよう、全力で取り組んでまいります。

新・おおい町のまちづくりに向けた取り組みがよくわかりました。町民の皆さまの創意工夫によりおおい町が一層発展していくことを楽しみにしております。本日はありがとうございました。



PICK UP!

町を活気づける農家の主婦パワー

人気を呼ぶおいしい町の手づくり特産品



農家の主婦たちが自分たちのアイデアで特産品を開発、ついに会社を立ち上げた。彼女たちと連携して地域振興に取り組む、おいしい町の活動に焦点を当てる。

【写真】
中央：おい夢工房の加工場でのクッキー作り
右上：おい町の特産である梅の収穫風景
上中央：テーマパーク「きのこの森」
左上：本郷地区から小浜湾を望む
右下：名田庄地区の田園風景
下中央：赤礁崎（あかくりざき）オートキャンプ場

概要

地元の農産物を使うことと、無添加にこだわった手づくりの味…。おい町に住む農家の主婦たちが開発した味噌、梅、キノコなどの加工品が人気を呼び、町の新しい特産品として定着してきた。グループを法人化してさらに前進を続ける、彼女たちの原動力となっているものは何か。町はそんな彼女たちと、どのように連携して地域振興に取り組んでいるのだろうか。

CHAPTER 1 (P.8)

まちおこしに目覚める農家ミセスたち

農業の副業としての菊花や味噌づくりを学ぶため、各地区から集められた農家の主婦たち。順調に味噌づくりに励んでいた彼女たちに訪れたピンチとは。どのようにして町の振興活動としての特産品づくりに目覚めていったのか。

CHAPTER 2 (P.9)

特産品づくりがみんなの喜びを創造

「おい夢工房」で開発された新しい特産品は大人気。県内をはじめ東京・大阪にまで販売が広がっていき、ついに合同会社を設立する。グループはなぜ法人化という自立の道を選んだのか。新商品としてスイーツに力を入れている理由とは。

CHAPTER 3 (P.10)

町・第三セクターと連携して前進

町内の特産品開発グループと町をつなぐ「核」として活動する第三セクター「株式会社おい」。おい夢工房とはどんな連携をとっているのか。そして町はどんな将来像を描き、町民たちと共に地域振興を推進しようとしているのか。

農家の主婦たちによる会社 ～おい夢工房～

地元の特産品開発のため、平成9年に結成されたおい町の町民グループ。平成19年に合同会社として法人化。メンバーはすべて専業・兼業農家の主婦で、現在正規とアルバイトを合わせて15人。月曜日から金曜日までの毎日、JR若狹本郷駅近くにある加工場で、地元産の食材を使った味噌・味噌加工品・惣菜・梅加工品・菓子などの特産品を製造し、町内外や大阪・東京など県外でも販売している。とくに年間5トン生産している米こうじ味噌は、すぐに売り切れてしまうほど人気がある。



メンバーはすべて専業・兼業農家の主婦



米こうじみそ



クッキー



梅ジャム

ねり梅かつお

梅肉エキス



きのこたき込みではんの素

まちおこしに目覚める農家ミセスたち

農業の副業としての味噌づくりが始まり

平成元年、町（当時の大飯町）は町内の各地区から専業・兼業農家の主婦一人ずつをピックアップし、合計十五人を集めて「ミセス農業懇話会」を組織した。その目的は、厳しい農業経営を打開するために農産物の加工品製造などの副業を勧め、その技術を身につけてもらうことだった。また、ますます進む農業離れを危惧し、若い人たちに楽しくやっていく農家の姿を見てもらうことも狙いのひとつだった。ミセス農業懇話会では町のJAでパートとして味噌作りと菊の栽培を実施していた。懇話会メンバーによる手作りの味噌は味がよいと評判が立ち、メンバーたちは味噌作りに手応えを感じるようになった。



合同会社 おおい夢工房
代表 徳庄 よし子さん

ところが平成八年に大ピンチが訪れる。広域合併で町のJAが隣の小浜市に移されることになり、今までメンバーが味噌作りをしていたJAの建屋が閉鎖されることになったのだった。

JAの広域合併で建屋が閉鎖でも味噌づくりは続けたい

「せっかく味噌づくりが軌道に乗って、メンバーもやる気があるのもつたない。JAさんから設備を譲り受けることもできたので、何とか会を続けさせてほしいと町にお願いしました」と当時を振り返るのは、「おおい夢工房」代表の徳庄よし子さん。ミセス農業懇話会からの申請を受け、町はひとつの案を提起した。それは町特産の梅やキノコを活用した加工品づくりを検討していたグループ「おおい町特産加工研究会」と合体して、活動を続けていかないかというものだった。知らない人たちと一緒にするのは…と徳庄さんたちは迷ったが、味噌づくりが続けられ、しかも新たに加工場も建設してくれるという提案に、メンバーは合意した。「当初は味噌づくりだけを考えていました。ところが合体してからは、

他の特産品づくりにも取り組まなければならぬ。当時は四十から五十才代で、田畑の仕事や家事もある主婦としては大変なことになったと思います。でもミセス農業懇話会からのメンバーたちは熱心でとても仲良しだったので、やめようとは思いませんでした」と徳庄さんは語る。

「おおい夢工房」を結成
新しい特産品が続々誕生

そして平成九年、二つの会が共同で「おおい夢工房」を設立。JR若狭本郷駅近くに開設された施設「おおい町情報交差点ぼくたる」での販売をめざし、特産品の開発が本格的にスタートした。しかし実際に活動を始めると、特産加工研究会の人たちと意見が食い違うこともあり、いろいろな苦労もあったという。そんな中で、以前から特産加工研究会が取り組んできた『きのこたき込みごはんの素』や懇話会メンバーによる『米こうじみそ』をはじめ、味噌加工品のおかずみそ三種、『梅ジャム』『梅肉エキス』さらに菓子やケーキなど、自分たちでアイデアを出し合っただけの商品を開発・販売していった。いずれの商品も好評であった。おおい夢工房が特産品づくりでこだわるのは、地元産の材料を使うことと、無添加であること、そして丁寧な手づくりである。



平成17年の「農林業センサス」によると、おおい町の農家数は596戸、就業人口は768人となっている

「地元の食材は、ふるさとの誇りです。味噌づくりに地元産の大豆と米を使うのはもちろん、おかずみそで使っている露のとう・唐辛子・柚子もみんなメンバーが生産したものです。梅やキノコも地元農家から直接仕入れています」と徳庄さん。商品はすべて夢工房の加工場で、入念な手づくりにより生産されている。たとえば『梅ジャム』は一個ずつ梅の皮をむくことでまるやかさが生まれ、『梅肉エキス』は採りたての青梅をアク取りしながら九時間も煮詰めて出来る上がる。

「私たち主婦の手づくりとは、つまり家族に食べさせたいと思う、お母さんの味」をつくることではないでしょうか。食べる人のことを思う心がかもっているから、商品を好きになってもらえるのだと思います」と徳庄さんは語る。こうして自分たちのつくる新しい特産品に手応えを感じながら、町の活性化への思いも芽生えていった。

特産品づくりがみんなの喜びを創造

町内・県外で商品を販売 手づくりの味が好評

「おいしい夢工房の商品は、ふるさと
の懐かしい温もりを感じさせる味わ
いが評判となり、町の施設である「お
おい町情報交差点ぼ〜たる」だけ
なく、町内のスーパー、道の駅、隣
町・高浜町のスーパーなどへと販路
を広げていった。またさらに東京(有
楽町・南青山)にある福井県のアン
テナショップでも味噌を販売。池袋
のデパートで開催された全国物産展
にも出品し、県のイベント「越前・
若狭フェア」などにも参加している。
二年前からは毎月一回、メンバーが
大阪の施設で出張販売も行ってい
る。

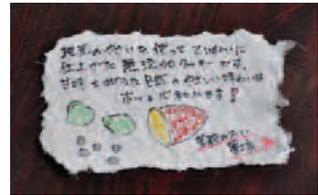
「最近では梅ジャムを使ったクッ
キーなど、スイーツづくりに力を
入れています。昔からのメンバーは



合同会社 おおい夢工房
経理担当 もりたけいこ
森田 経子 さん

歳をとってき
ていきますの
で、お菓子づ
くりの得意な

若い人(二十
代二人と四十
代一人)にア
ルバイトで来
てもらっています。やはり若い人の



クッキーなどの商品に添えられる手
づくり感いっぱいの絵手紙

センスは違いますね」と語るのは、お
おい夢工房で主に経理を担当してい
る森田経子さん。スイーツは金沢市
にあるデパート地下の常設コーナー
でも販売されている。商品販売のた
めには、ラベルやパッケージのデザ
インも大切なポイントだが、専門の
デザイナーに依頼すると費用もばか
にならない。そこで最近では、絵手紙
の得意なメンバーのデザインをラベ
ルやパッケージなどに採用している。
「若い人の参加は、将来正規メンバ
ーになってくれる人を育てることに
も繋がります。夢工房ではデザイン
だけでなく、たとえば材料の下ごし
らえをすること、調理すること、営
業関係などメンバーの得意なところ
を活かして仕事を配分しています」と
話す森田さん。彼女も得意な経理
部門で、おおい夢工房を支えている。

町の補助金に頼らず 法人として独立

平成十九年、おおい夢工房は法
人として独立した。メンバーが出
資金として一口十万円を出し合
い、合同会社を設立したのだ。お
おい町からは補助金が支給され
ているが、平成十八年からお
おい夢工房は加工場の賃料として
二十一万六千円を
支払わなければな
らなくなった。そ
れまで一度も赤字
を出したことがな
く、事業が順調だ
と評価されたの
か、補助金は事実
上半分以下となっ
てしまった。それ
でも頑張ってい
るのに、町の中
には「補助金に頼り、
楽しんで活動してい
る」と言う人もい
たという。

その頃、九州の
熊本で、法人化し
て活発に事業を推
進している主婦グ
ループがあること
も知った。法人化

＊おおい町情報交差点 ぼ〜たる

JR若狭本郷駅の北側、国道27号
沿いにある施設。おおい町の観光案
内や特産品の販売を行っており、軽
食・休憩コーナーもある。



店内には特産品が並ぶ



SL義経号が目じるし

施設内にはおおい町大飯地域をジオラ
マにした鉄道パノラマ模型を展示。平成
2年の大阪『国際花と緑の博覧会』で運
転されていたSL義経号のミニチュアが
走り、町内の施設等を映像で紹介する仕
組みとなっている。そして広場には原寸
大のSL義経号が展示されている。

また、毎週日曜日(冬期を除く)には、
地元野菜等の「旬の市」が開催される。

すれば、会社の経営を真剣に考えて
いかねばならない。だが、いつまで
も補助金には頼りたくないという思
いが強くなり、ついに法人化を決断
したのであった。法人化したことで町
に対しても、他の企業に対しても信
頼感がより高まった。なにより販路
開拓、受注拡大の面で有利である。
しかし法人化のメリットはそれだけ
ではないと森田さんは語る。

メンバーの時給は代表以下すべて一律で671円。それでも「楽しく働くことができ、そのうえお小遣いまでもらえる」とメンバーは語る



「米を全国に根強いファンを持つ」
「お米の味を大切にしている」
「米を全国に根強いファンを持つ」
「お米の味を大切にしている」

「自立は、いわばハートの問題。現在、メンバーの時給は一律で六百七十一円でボーナスもありませんが法人化したことで全員に新しい責任感が生まれました。責任を持って働き、出来上がった商品がお客さんに喜ばれたら、みんなの喜びはさらに大きくなります。大変なこともあるけれど仲間がいて楽しく働け、そのうえお小遣いまでもらえるのですから、こんないいことはありません」

商品の信頼性が高まり、ますます順風満帆かと思われたおおい夢工房。しかしここ数年来の不況で売上げは伸び悩んでいる。無添加にこだわると賞味期限が短くなり、それが小売りで敬遠される一因にもなっている。売上げを伸ばすために規模を拡大するという手段もあるが、それも難しいという。手づくりによる品

質を維持するためには、もっと多くの人手が必要となる。設備投資もしなければならぬからだ。

「以前、石川県・和倉温泉の全国的に有名な旅館から、厨房で使うために味噌を年間五トン仕入れたいという話がありました。その時、生産規模を大きくしようかと考えましたが結局お断りしました。もしも注文が突然なくなってしまうたらどうしようと思ったからです。やはり手づくりには限界があります」と代表の徳庄さんは語る。

「お金もうけだけでなく、地域振興にいちばん大切なのは人と人のつながりだと思えます。ハートのないところには何も生まれません。商品の競合がないようにうまく調整しながら、私たちのようなグループがもっと増えていってほしい。町のみんなが少しでも町の将来を思う心を持つことが大切ではないでしょうか」

徳庄さんは町のグリーンツーリズム活動にも参加している。来年には名古屋の中学校が修学旅行でおおい町を訪れ、田植えや地引き網の体験などをしてもらう予定とのことである。

CHAPTER 3 町・第三セクターと連携して前進

町と町民グループを結ぶ核となる株式会社おおい

おおい夢工房のような町民グループと連携し、活動を推進しているのが第三セクターの「株式会社おおい」だ。株式会社おおいの前身は(株)大飯ふるさと振興公社で、平成十九年に営利法人に転換した。主な事業は「赤礁崎オートキャンプ場」、「長井浜海水浴場」、「きのこの森」、天然温泉施設「あみーシャン大飯」、「おおい町情報交差点ほくたる」など観光施設の管理運営と、「スーパー大

火勢」などイベントの企画運営、「きのこセンター」でのシイタケの菌床栽培・販売、そして特産品開発(『鯖へしこ茶漬け』、『梅カステラ』などを商品化)である。

町民グループの中ではおおい夢工房との関わりが最も強く、おおい町



株式会社おおい
本部事務局副参事 木村 博信 さん

情報交差点ほくたるでの商品販売、きのこセンターで栽培したシイタケの提供、観光施設などにおけるイベントでの商品販売を行っている。またおおい夢工房に一次加工品として梅シロップなどを発注し、自社の特産品開発にも利用している。

「法人化したおおい夢工房は、工場の生産体制、商品管理、受注体制などがしっかりとっていて確実に注文に応じてくれる。安心して連携していけるグループです。できればうちの特産品の原材料としてもっと一次加工品を発注できるようにしたい」と語るのは、株式会社おおい本部事務局の木村博信さん。

特産品の販売ルートの開発では、贈答用セットとしておおい夢工房の商品を利用しており、三年前から始めたインターネットのショッピングサイトにも商品を掲載している。

「それから今後もおおい夢工房と連携をしながら、もっと町の観光事業と一体化して特産品の開発と販売を進めて行きたい。おいしくても流通ルートに乗せられない食べ物もありますから、なるべく沢山の方におおい町に来ていただいて、お客様と直接出会える場所や時間も増やし

て、美しい自然に満ちた土地柄やあたたかみのある人柄をセットにすることで付加価値をつけていくことも大切だと思います」と木村さんは熱心に語る。

助成金や施設建設などで町も連携を推進

おおい町では平成二十年度からの「第一次おおい町総合計画」の中で、観光・交流を重要ポイントとして位置づけ、めざすべき町の姿として「住む人に豊かさを、訪れる人に感動を」おおい町ふるさと創生物語」をスローガンに掲げた。これに伴い、町のウォーターフロントに若狭湾リゾート「うみんぴあ大飯」を建設。新たな観光拠点とし外部との交流促進をはかっている。敷地内にはまだスペースがあり、今秋には大型のホームセンターが出店するなど、今後も施設の誘致・建設が計画されている。



おおい町農林水産振興課
なかにま たけし
主事 中嶋 武士さん

★若狭湾リゾート うみんぴあ大飯

福井県・おおい町・わかさ大飯マリンワールド(株)により造成された埋立地に建設された複合施設。山や半島などの美しい眺めを生かし、ウォーターフロントの魅力を存分に取入れた設計で、マリンレジャーはもちろん、子供たちが海を通して自然を理解する空間づくりを目的としている。

敷地内には健康増進のための温浴施設・プールやレストランを備えた宿泊施設『ホテルうみんぴあ』のほか、帆船と海をモチーフにした冒険体験ゾーン&ものづくりと食をテーマにした工房体験ゾーンがある遊びとふれあいの空間『こども家族館』、エネルギーと地球の未来を遊びながら学べる『エルガイアおおい』、マリンスポーツの拠点としてクラブハウスを備えた『マリーナ』などの施設がある。



施設整備が終わり今後の発展が期待される

★おおい町水産加工センター

今年4月、町の水産物の魅力を、全国に発信する生産拠点として大島地区に誕生。地元で穫れる水産物に加工で付加価値を付け、町の伝統的な料理を再発見すること、また魚などの有効利用で消費の拡大と食文化の向上をはかり、さらなる町の活性化につなげることを目的に建設された。

施設内には「へしこ・干物などの製造室」「魚肉のすり身を製造、それを材料とする練り製品の製造室」「焼き物・煮物・揚げ物など惣菜全般の製造室」の3つの製造室を配置。さらに製品の熟成・保管用の倉庫も併設され、へしこ約1万本を保管することができる。

鯖のへしこ



今年4月、大島地区に誕生

四月には「おおい町水産加工センター」が竣工。町の水産物を使った特産品の製造、開発を行っている。特産品開発グループに対して町が行っている事業について、おおい町農林水産振興課の中嶋武士さんはこう語る。

「地元の農林水産業の活性化になげたいとの観点から農林水産振興課が特産品開発を担当しています。生産者からの原材料の橋わたしや、様々な情報の提供を行うほか、各種相談の窓口となっています」

町ではおおい夢工房のほかにも、

たとえば水産加工物の有効利用をめざす大島漁協女性部の「島じゃこ倶楽部」、大島の主婦グループ「たまてばこ」や、特産自然薯の効率生産を研究するグループなどに補助金を交付している。また生産施設づくりでバックアップをはかっている。

「近年ではグリーンツーリズムなどの交流事業も活発化してきまし

た。これからも町内のグループと連携して、町の活性化を推進していきたいと思います」と中嶋さん。

農家主婦たちのふるさとを愛するパワーによって、地域を元気にしたいという心が湧き上がっているおおい町。まさに「おおいなる未来」に、向かって前進するおおい町のこれからは、期待が高まる。

「おおいなる未来」づくりはふるさとを愛する心から

Me Anale ～ 専門家の視点から～

本財団では、電源地域の抱えている課題の克服や問題の解決に向けて、地域振興に関する各分野の専門家による現地指導や各種調査を実施しております。そうした地域振興専門家の活用ポイントなどを専門家自ら紹介していただきます。

テーマ

専門家とのコラボレーションの仕方

講師



流通科学大学

サービス産業学部 教授 たかはし かずお
高橋 一夫 さん

大阪府立大学大学院修了。専門はブランド論、観光マーケティング、観光事業論、観光まちづくり計画など。元 JTB コミュニケーション事業部長。総務省地域再生マネージャーとして、日光市鬼怒川温泉再生計画の一環としての地域ブランド再生、唐津市観光協会による着地型旅行事業の立ち上げと観光まちづくりの支援事業、倉敷市の倉敷ブランド立ち上げと育成支援事業、和倉温泉を中心とした七尾市でまちぐるみ観光などを手がけている。

主な著書:『1からの観光』(編著) / 碩学舎、『現代の観光事業』(共著)『観光・旅行用語辞典』(共著)『観光文化論』(共著)『観光事業論』(共著) / ミネルヴァ書房ほか。

残念ながらそうした声があるのは事実ですね。これは専門家と地域それぞれに課題があるように思います。専門家側の課題ですが、専門家に持つべき資質が不足していることがあります。地域振興を担う人材に求められる資質は大きく五つあると思います。一つめは当たり前のように聞こえると思いますが、「地域づくりに対する見識を持っていること」です。特産品も観光もそのマーケットの将来を見通して、少なくとも五年～十年先の地域の将来像が描ける見識が必要だということ です。

二つめは「人的ネットワークを構築できること」です。専門家自身の分野における人脈があるかということと、地域振興を現実に進めていく

残念ながらそうした声があるのは事実ですね。これは専門家と地域それぞれに課題があるように思います。専門家側の課題ですが、専門家に持つべき資質が不足していることがあります。地域振興を担う人材に求められる資質は大きく五つあると思います。一つめは当たり前のように聞こえると思いますが、「地域づくりに対する見識を持っていること」です。特産品も観光もそのマーケットの将来を見通して、少なくとも五年～十年先の地域の将来像が描ける見識が必要だということ です。

二つめは「人的ネットワークを構築できること」です。専門家自身の分野における人脈があるかということと、地域振興を現実に進めていく

Point

地域側が主体性を持って専門家を活かすこと

案件

地域振興の場面においては地域の課題解決、特に特産品・観光商品開発や販路開拓などのために、専門家とのコラボレーションが有効な手段となることが多い。しかし、期待通りの成果を上げることができない結果となることもある。どこに問題点が潜んでいるのだろうか。

質問1…行政や地域団体などから、専門家を活用したけれども期待どおりにならなかったという声を聞くことがあります。どのような点に留意すべきでしょうか。

ために、地元の人たちも含めた様々な分野の人たちと関係を構築することが求められます。

三つめは「担当する地域に愛着を持っていること」です。地域の人が気づかない魅力をよそ者の視点で見出しながら、地域に根ざした活動を行なうような愛着をもって地域を捉えられるかということ です。

四つめは「顧客ニーズを把握する力をもっているか」です。地域を訪れる人のニーズ、特産品を買い求める人のニーズを満たすことができるようマーケティング思考が求められます。

最後は「根気強さがあるか」ということです。地域の様々な人たちとの折衝、施策提案の説明、地域外のパートナーとの調整を行ないながら具体化していくわけですから根気強さがないと務まりません。

一方、地域側の課題ですが、専門家からよく耳にすることが三つあります。

一つめは「専門家への依頼前に課題が明確になっていない」ということです。特産品にしても観光振興にしても、市場との接点をいかにマネジメントするかまで持っていないと地域になんら経済効果をもたらしません。意のままにならない市場を相手にするわけですから、創意工夫をする気持ちを持ち続けることも大事ですが、それだけで何とかなるほど市場は甘いものではありません。千に三つも当たればいいということではダメなのです。「消費者に向けて何をしたいのか」を明らかにし、消費者から「そうそう、こんな体験ができるのに行きたかった」とか「そうそう、こんなものが食べたかった」と言ってもらえるような価値をつくるためには、何が課題なんだろうかを知っておくことは必要です。もつとも課題が何かをはっきりさせることを専門家に依頼する場合もあると思いますが、その時は最初からそのように専門家に伝えるべきでしょう。

二つめは「行政と地域事業者との意思統一がされていない」という声です。これは行政と事業者だけに限りません。依頼者である行政内部、議会、事業者間それぞれに利害対立していることもあり、一筋縄ではいかないことも多々あります。しかしながら、電源地域振興センターの産品相談・商談会などでは、特産品振興・観光振興と対象がはっきりしているだけに「消費者の

質問2.. 地域側で当初認識していた課題が表層的なものにすぎず、根源的な「真の課題」が専門家との対話の過程にて明らかになるケースも多いと思います。「真の課題」が依頼した専門家の得意分野とは異なる場合には、中途での専門家交代も視野に入れるべきなのでしょうか。

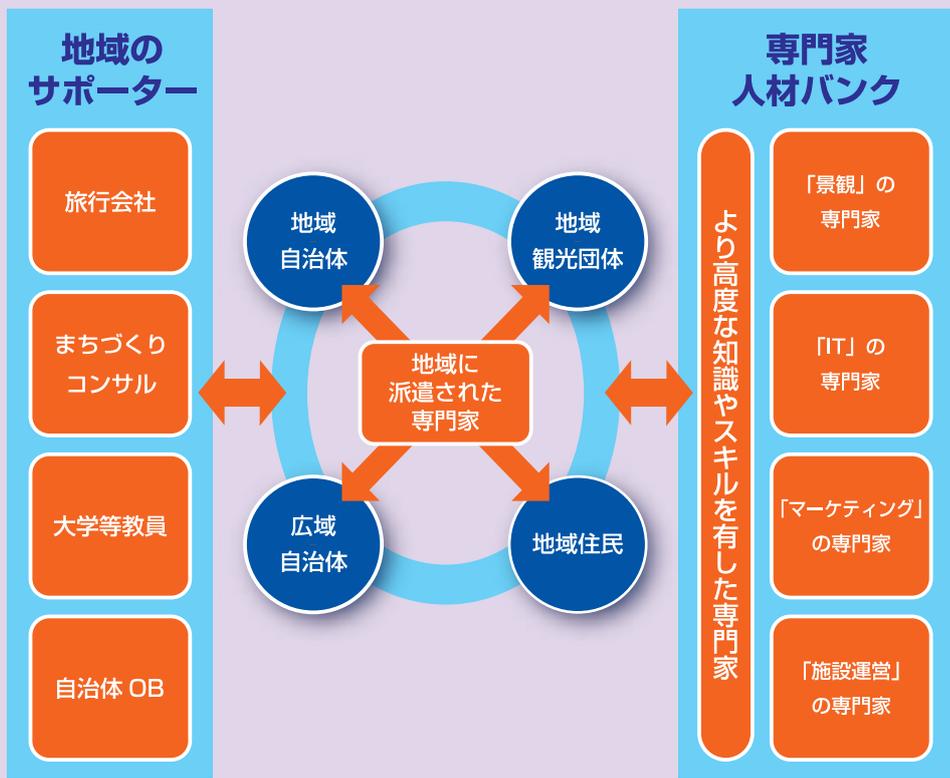
価値」が意思統一のキーワードにならなければいけません。三つめは「専門家に対する過度の期待」です。専門家は「その道」の専門だから何でも任せて大丈夫というわけにはいかないでしょう。特に二つめに紹介した意思統一を図るための地元調整は、地元の人たちは避けて通るわけにいきません。実施主体も地元が意思決定をする必要がありません。また、誤解を恐れずに言えば、先に紹介した専門家の持つべき五つの資質を全て兼ね備えた人が少ないことも事実です。行政担当者も専門家のどこが優れているかを発見して、その資質を積極的に活用することも必要でしょうし、専門家に対し「あなたには何を期待したい」ということを率直に伝えることも必要な場合もあるでしょう。

必要に応じて専門家の交代という選択もあると思います。しかしながら、「地域の真の課題」を発見してくれた専門家は、地元の人たちとのコミュニケーション能力が高いとか、よそ者視点での課題発見能力があると

か、得がたい人材であることも事実でしょう。そういう人を代えても後々、後悔することも多いものです。こうした質問のようなケースのため、専門家の派遣機関は左図のように「地域に派遣された専門家」をサポートする「専門家人材バンク」や「地域のサポーター」とのネットワークを構築

築しておくことが必要です。地域の真の課題に対して必要な人材を「地域に派遣された専門家」に紹介し、チームでの対応ができるようにすることが求められているのです。地域側は、専門家の派遣機関がそうしたネットワークを構築しているかどうか事前に確認すべきでしょう。

観光振興を例とした専門家バックヤード機能



出典：筆者作成



「売れる商品」づくりのお手伝いを いたします

当センターでは、電源地域市町村の地域資源のブランド化支援等を目的とした取り組みとして、各地域で生み出された産品（特産品）の開発・改良及び販路拡大につながる「産品相談・商談会」を年間四回程度実施する予定です。

今年度の第一回は五月二十八日に、千葉市の幕張メッセで開催された「旅フェア2010」の会場内において実施し、多数の参加をいただきました。その様子は当センターのホームページで公開しています。第二回は九月六日に大阪市の大阪科学技術センターで実施を予定しています。

■バイヤーとの個別面談

「産品相談・商談会」では、大手百貨店やスーパーのバイヤーとの個別面談を通じて、バイヤーから見た消費者のニーズ・地域性・流行など、現在の流通業界における商品開発の考え方に基づいた「売れる商品づくり」について様々な角度からアドバイスを行



【平成22年度実施予定】第1回：5月28日（金）／千葉（終了）、第2回：9月6日（月）／大阪、第3回：11月／東京、第4回：2月／福岡

「産品相談・商談会」のご案内

います。更に、バイヤーから高い評価を受けた特産品については、店舗等における商品取引につながることも可能ですので、販路の拡大にも最大限にご活用いただけます。

■パッケージ・デザイナーのアドバイス

「産品相談・商談会」の特徴として、商品パッケージ専門のデザイナーからアドバイスを受けることが出来る「デザイン相談」を実施しています。「見たい訴求力を強化したい」といった課題に特化した相談にも応じています。

■参加募集のご案内

詳しい実施内容は決まり次第、当センターのホームページで参加募集のご案内をいたしますので、特産品の流通を通じた地域おこしに意欲的な方々の参加をお待ちしています。

なお、「産品相談・商談会」は年間四回程度の通常開催以外にも、地域のご要望に応じた現地開催型の実施も受け付けています。ご予算等に応じて実施内容のご提案をさせていただきますので、お気軽にお問い合わせください。

【お問い合わせ先】

（財）電源地域振興センター
振興支援部 販売支援課
電話：03-6372-7310
ホームページ：http://www2.dengen.or.jp/html/works/hanbai/sanpin.html



エネルギー・環境・原子力に関する 講師を派遣します

「講師派遣事業」実施のご案内

当センターでは、経済産業省資源エネルギー庁から『原子力有識者等活用事業』の委託を受け、全国の地方自治体や各種団体等からの要請に応じ、講演会、シンポジウムなどへ、エネルギーや原子力に関する最新の専門知識や情報をお持ちの専門家を講師として派遣します。

■派遣対象

1. 全国の民間団体、自治体等の主催する講演会等（講演方式）。
2. 参加予定人数が概ね二十名以上で参加費等が無料の講演会、研修会等。
3. 講演のテーマは原子力、エネルギー、環境問題、核燃料サイクル、放射線・放射能、電源地域における地域振興、原子力防災、原子力広報等とします。

■派遣実施期間

平成二十二年五月～平成二十三年三月

■費用

講師派遣に関する経費（講師の旅費、謝金、資料費等）については当センターが負担いたします。

■派遣する講師

お申し込みいただいたテーマに適切な専門家を選定いたします。ご要望がある場合にはご相談に応じます。

■申込方法

※講師派遣申込書に必要事項をご記入

【お申し込み・お問い合わせ先】
（財）電源地域振興センター
振興業務部 振興業務課
電話：03-6372-7305
eメール：youbou@dengen.or.jp



電源地域の人材育成や情報収集のお手伝いをします

「研修」実施のご案内

当センターでは、平成二年度より、電源地域の長期的かつ自立的な振興をお手伝いするため、研修事業を行っております。昨年度は、二四六の市町村から八六二名のみなさまにご利用いた

だきました。本研修を、効率的な人材育成・情報収集・知識習得に活用していただきたく、ご参加をお待ちしております。

平成22年度 研修一覧

No.	テーマ	時期	日数	定員	参加費	研修場所	講座のポイント
1	問題解決・企画立案能力開発講座	H22.7	3	20	25,000円	電源センター	ステップを辿った演習、また、自治体業務に精通した講師により、問題の抽出から具体的な解決方法までを学びます。
2	ファシリテータ能力開発講座 ～ワークショップの進め方を学ぶ～	H22.11	2	20	20,000円	〃	実践的なトレーニングにより、ファシリテータ能力を習得し向上させることを目的とします。
3	協働によるまちづくり ～行政・住民・NPO等との連携～	H22.10	2	20	20,000円	〃	現状や課題、行政と住民の役割、NPOの取り組み等について、実践者等からの講義や先進事例により学びます。
4	少子高齢社会における地域づくりを学ぶ	H22.10	2	20	20,000円	〃	安心して子を生育てられる環境づくり、高齢者が活力を持って暮らすことのできる地域づくりを学びます。
5	農業で地域を元気に ～所得向上・地域活性化等～	H22.12	2	20	20,000円	〃	直売所や農家レストラン、農商工連携等による農業者の所得向上策や雇用の確保等の各種方策を学びます。
6	地域特性を活かした特産品の開発・販売促進を学ぶ	H22.9	2	20	20,000円	〃	その地域ならではの資源・特性を活かした特産品の開発や実践的な販売促進方法のポイント等について学びます。
7	少子高齢時代のまちづくり ～安全・安心して豊かなまちづくり～	H23.1	2	20	20,000円	宮城県仙台市	これからは少子高齢社会を前提としたまちづくりが必要であり、そのまちづくりについて、事例を中心に学びます。
8	行政・住民・団体が共に地域を創る ～協働による地域づくり～	H23.2	2	20	20,000円	福岡県福岡市	協働によるまちづくりのポイントは何か、行政・住民・団体による協働のノウハウを学びます。
9	地域特性を活かした特産品の開発・販売促進を学ぶ	H23.2	2	20	20,000円	大阪府大阪市	東京圏に次ぐ商圏である関西地方のマーケットを視野に入れた、特産品の開発・販売促進について学びます。
10	地域資源を活かした観光振興を学ぶ ～持続可能な観光まちづくりを探る～	H22.10	3	20	25,000円	先進地(場所未定)	観光まちづくりの先進地において、観光まちづくりのポイントやヒントをより実践的に学びます。
11	海外研修(トップセミナー) 海外の地域振興とエネルギー事情を学ぶ ～世界の先進地から～	H22.10	7	10	約80万円	ヨーロッパ	海外における地域振興の先進事例と原子力発電施設等を視察し、その取り組みと原子力政策について理解を深めます。
12	海外研修(一般セミナー) 海外の地域振興とエネルギー事情を学ぶ ～世界の先進地から～	H22.10	7	20	約60万円	ヨーロッパ	海外における地域振興の先進事例と原子力発電施設等を視察し、その取り組みと原子力政策について理解を深めます。

※詳細は各市町村に送付しております「研修のご案内」またはホームページ(<http://www2.dengen.or.jp/>)をご覧ください。

■事業の特色

※地域の活性化に係るニーズの高い研修テーマの設定。
※最適な講師の選定による講演、先進事例の紹介、日常業務に即したケーススタディ等による具体的で実践的な研修内容。

■参加対象

電源地域の市町村・都道府県等の行政職員、各種団体、事業者、NPO、個人、電力会社等で電源地域の振興に関わっている方。

■その他

※各研修の詳細につきましては、開催の1〜2ヶ月前までにお知らせいたします(テーマおよび内容・時期等は変更することがあります)。
※参加者が定員になり次第、締め切らせていただきますので、お早めにお申し込みください。



「おいしい町からふるさと味の「飛梅の里梅たっぷりゼリー」を

今号の「PICK UP!」にご登場いただきました株式会社おおいのご厚意により、「飛梅の里梅たっぷりゼリー 十二個入り」を五名様にプレゼントいたします。

■プレゼント応募方法

とじ込みのアンケートはがきに必要な事項をご記入して郵送もしくは、当センターのホームページ(文末参照)の入力フォーム内のアンケートにご記入の上、「送信」ボタンを押して送信してください。

※切は平成二十二年七月三十日。アンケートはがきは当日消印有効です。当選の発表は発送をもって代えさせていただきます。



「飛梅の里梅たっぷりゼリー 12個入り」に関するお問い合わせ先
株式会社おおい
〒919-2104
福井県大飯郡おおい町成和2-1-1
TEL:0770-77-2811 FAX:0770-77-2840
<http://www.wakasa-ohi.co.jp>

「アンケートおよびプレゼントに関するお問い合わせ先」
(財)電源地域振興センター
振興支援部 普及啓発課
電話:03-6372-7312
ホームページ: <http://www2.dengen.or.jp/html/leaf/furusato/enquete.html>

【お申し込み・お問い合わせ先】

(財)電源地域振興センター
振興支援部 人材育成課
電話:03-6372-7300
eメール: jinzai@den-gen.or.jp まで



若州一滴文庫



▲年2回の定期公演が催される竹人形劇場は背景が大きな硝子のはめこみになっており、その後ろに広がる竹やぶが内外一体となって趣のある効果を生み出している。



◀作家水上勉氏は、おおい町に生まれ、代表作に『雁の寺』『越前竹人形』『良寛』などがある。



▲敷地内には本館、竹人形館、劇場、庭園、竹紙工房、六角堂など趣のある和風建築が建ち並ぶ。

郷土の作家水上勉氏が主宰した竹人形文楽の劇場と、六十体の竹人形、二万冊の蔵書や水上文学にゆかりの深い渡辺淳氏や須田剋太氏などの絵画、文学関連資料などを収蔵しています。

茅ぶきの和風建築や庭園の落ち着いた風情の中で幻想的な竹人形や水上勉氏の文学に触れると、竹が生み出す独特の世界に思わずひきこまれます。

竹人形劇場では春と秋の二回、若州竹人形座による定期公演が催されています。また、文庫の中央付近に建てられている六角堂では麺類やよもぎ餅などが用意されており、囲炉裏のそばでゆっくりとくつろぐことができます。

- 【開館時間】 午前9時～午後5時
- 【休館日】 火曜日（祝日の場合は開館、翌日休館）、年末年始（12月29日～1月3日）
- 【入館料】 大人300円、団体30名以上240円、中学生以下・70歳以上の方は無料

■お問合わせ先
特定非営利活動法人 一滴の里
〒919-2116 福井県大飯郡おおい町岡田字小近谷2の1
TEL.0770-77-2445 <http://www.itteki.jp/>

- 交通
- ◎電車利用の場合
JR北陸本線「敦賀駅」からJR小浜線で「若狭本郷駅」下車。「京都駅」からJR山陰本線とJR舞鶴線「東舞鶴駅」を経由してJR小浜線「若狭本郷駅」で下車。同駅から車で5分。福鉄バス利用の場合「大飯中学校前」で下車、徒歩3分。
- ◎車利用の場合
地図参照

